

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月5日現在

機関番号：80101

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320167

研究課題名（和文） 日本領期における樺太移民文化の民俗学的研究

研究課題名（英文） Ethnological Research on the Cultures of the Immigrant People to Karafuto in Japan Era, 1905-1945

研究代表者

村上 孝一（MURAKAMI KOUICHI）

北海道開拓記念館・学芸部・学芸員

研究者番号：50150157

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本領期における樺太移民の民俗に関する情報を収集するとともに、現代のサハリンに残る日本領時代の物質文化についての調査を行った。得られた情報は同年代の北海道の民俗と比較分析し、その作業をとおして、日本領期における樺太移民文化の特性の一端を明らかにした。また、明らかになった当時の樺太移民文化の特性をふまえ、樺太史・樺太文化に関する展示プログラムの検討を行った。

研究成果の概要（英文）：This research project collected the information about the folk lives of the immigrant people to Karafuto (Sakhalin) in Japan era, 1905-1945, and investigated the material cultures left in Sakhalin now, which they used. Comparing the data about the folk lives of Karafuto with them of contemporary Hokkaido, we made clear some features of the cultures of the immigrant people to Karafuto. Being based on these features, we investigated some exhibition programs of the history and culture of Karafuto.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2010年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2011年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
年度			
総計	11,800,000	3,540,000	15,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：民俗学

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、平成16年度～18年度科学研究費補助金「在サハリン朝鮮民族の異文化接触と文化変容に関する基礎的研究」（基盤研究（B）（海外学術調査））による研究成果をふまえ、新たに着手したものである。

前回の研究では、日本領時代から現在に至るサハリン朝鮮民族文化をめぐり、衣食住生

活、行事や信仰、言語、社会生活、民族技術、民族知識などの変遷について、サハリン州や永住帰国者の暮らす韓国安山市などで基礎情報を収集・記録した。また、サハリン朝鮮民族の居住や多様な民族関係に関する基礎史料を収集・リスト化してきた。

(2) これらのサハリン朝鮮民族文化の調査をとおして、日本領時代を経験したサハリン在住の朝鮮人（以下、「サハリン在住朝鮮人」と韓国に永住帰国した朝鮮人が、当時の樺太移民文化について、サハリンでの地理的な説明を加えながら経験に即して極めて客観的に語れることを確認した。また、日本領時代の日本人や朝鮮人が使用していた物質文化（家財、民具）が、現代においてもサハリン在住朝鮮人宅で使用され、相当量が物置などに残されていることも明らかとなった。

ここにおいて、かつて日本領南樺太に居住し現在日本に在住する日本人・朝鮮人（以下、「引揚者」と記載。）からの聞き取り調査に加え、サハリンに残留した日本人ならびにサハリン在住朝鮮人からの聞き取り調査と現存する物質文化の調査という手段で、日本領期における樺太移民文化をよりリアルに構築できる余地が残されていることから、重要なテーマでありながらもこれまで行われることのなかった北海道の生活文化と樺太の生活文化の比較研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

(1) 北海道の生活文化については、移住による民俗の移動・継承・変容・消滅・誕生という視点から、北海道開拓記念館を中心に、研究を蓄積してきたところであるが、いまだ不十分な領域も残されていた。一方、樺太に目を向けると、樺太アイヌ研究についてはある程度の蓄積がみられるものの、樺太移民の生活文化については、日本領期の若干の民俗誌が残るのみで、その精査や本格的な研究はほぼ行われてこなかった。

その結果として、北海道と樺太は多雪寒冷地であり、かつ日本全国からの移住者により全国の民俗が持ち込まれ、再編成されていった地であるという共通項から、その文化の共通点を想起させるが、その共通点の実態は明らかとなっていない。また、北海道庁と樺太庁の移住政策や統治政策の違いが文化の再編成に違いをきたしたことが予測されるが、この相違点についても明らかになっていない。

本研究は、このような日本領期における樺太移民文化の研究の実態をふまえ、北海道との比較の視点をもちつつ、民俗学的に補完することを第一義的な目的とした。

(2) 具体的には、①日本領期の南樺太における移住民（日本人と朝鮮人。以下、「樺太移民」と記載。）を調査対象として、衣食住生活、生業、社会生活、信仰、年中行事、民俗芸能、民俗遊戯、民俗知識、民具などの民俗事例について、漁村、農村、炭鉱街、都市部

などに分けて、概ね昭和10年代を時間軸とし、データを収集・整理すること、②そのデータを北海道のデータと共時的に比較分析し、宗谷海峡を挟んだ当時の生活文化の共通点と相違点を導きだし、樺太移民文化の特性の一端を明らかにすること、③そのうえで、博物館における樺太移民の民俗（生活）展示プログラムの開発に向けた検討を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、北海道開拓記念館を研究の中心拠点として訪問調査班と文献資料調査班を設置し、専門性を勘案のうえ適切な研究体制を整え、効果的に調査を進めた。

訪問調査は、引揚者の多い北海道を中心とした日本国内、および日本領樺太時代を経験した残留日本人と朝鮮人が居住するロシア・サハリン州南部、さらには永住帰国した朝鮮人の暮らす韓国各地域で行った。なお、研究初年度においては、サハリン州郷土博物館から全面的な協力をいただくための覚書を交わした。そのことによって、サハリンでの現地調査を、効果的かつ円滑に進めることができた。

文献資料の調査は主として日本国内で行った。写真資料の調査は、訪問調査のなかで提供された写真の複写、および日本国内の各機関所蔵の資料の複写、および刊行されている写真帳の複写により行った。

情報の共有、分析、考察のため、定期的に研究会を開催し、より高度で波及効果、普遍性のある公表を、組織が一体となって進めていった。また、最終年度となる平成23年度は、当初計画のとおり進まなかった調査、補充・追跡の必要がある調査を優先して行う年度と位置づけた。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

① 昭和10年代における樺太移民の民俗に関するデータの収集

日本に居住する引揚者、サハリン残留日本人、サハリン在住朝鮮人、韓国への永住帰国者を対象に聞き取り調査を行い、概ね昭和10年代に時間軸を設定し、樺太移民の衣食住生活、生業、社会生活、信仰、年中行事、民俗芸能、民俗遊戯、民俗知識、民具などの民俗事例について、漁村、農村、炭鉱街、都市部などに分けて、データを収集・整理した。文献資料（文書、新聞、民俗誌）や写真資料からも、データを収集・整理した。

②現代のサハリンに残る日本領時代の物質文化の記録・収集

サハリン残留日本人およびサハリン在住朝鮮人宅の訪問調査をとおして、各家庭に残されている日本領時代に日本人や朝鮮人が使用していた物質文化（家財、民具）を記録した。

③北海道移住民文化の未解明部分の解明

「板かるた」による百人一首の普及や「ロウソクもらい」の行事の普及など、北海道の移住民文化を物語る民俗事例については、その普及の背景や時期が必ずしも明らかとなっていない。また、北海道の朝鮮民族文化についても、これまでほとんど調査はなされてこなかった。これらの調査に着手し、昭和10年代の南樺太のデータと比較可能な環境作りを行った。

④北海道のデータと比較

昭和10年代の南樺太のデータを、同年代の北海道のデータと比較分析することをおして、それぞれの文化要素について宗谷海峡を挟んだ当時の生活文化の共通点と相違点を導きだし、日本領期における樺太移民文化の特性の一端を明らかにした。

⑤樺太文化史の展示プログラムの検討

明らかになった日本領期における樺太移民文化の特徴をふまえ、その民俗（生活）展示プログラムの開発に向けた検討を行い、北海道開拓記念館等における樺太史・樺太文化展示の実現に備えた。

(2)得られた成果の位置づけ

①欠落していた日本史の掘り起こし

日本領樺太史は忘却されてはならない日本史の重要な部分でありながら、これまでの研究は政治史、経済史、朝鮮人の移住と残留に焦点をあてた歴史あるいは樺太アイヌ文化の研究に偏り、日本領樺太の全体的社会事実をとらえようとするものではなかった。本研究はその欠落部分を補完するべく、よりリアルな生活実態を民俗学的視点から掘り起こし、その成果は今後の樺太研究に視野の拡がりを促すなど関連研究分野への波及効果を生み出すものとする。

②緊急性を要する研究の実践

日本在住の引揚者および南サハリンにおいて日本領時代に少年・少女時代を過ごしかつ日本語を話せる朝鮮人から経験に即して話を聞くことのできる時間は、それほど残されていない。この時期を逸すると、日本領期の樺太移民文化史は、極めて断片的なものしか残らないことになりかねなかった。本研究

は、そのような緊急性を要する民俗調査の実践でもあったと考える。

③北海道とサハリンの文化交流の促進

現在、北海道においてさえ、サハリンにかつて日本人がいたことや現在朝鮮人が居住する意味を知る人は少なくなっており、その歴史に対する認識はきわめて薄い現状にある。本研究成果を積極的に社会・国民に発信することにより、その歴史認識を深め、北海道とサハリン州の文化交流の促進に込めるものとする。

④樺太史・樺太文化展示の実現にむけて

公的博物館で、日本領期樺太の歴史や文化に関するまとまった展示はみられない。その歴史認識を深め、文化交流の促進に寄与するための具体策として、日本領期樺太の展示プログラムを開発していくことが、重要な課題となってくる。そのなかでも、樺太移民の民俗（生活）展示は、樺太に暮らした人々のリアルな歴史を知るうえで、欠かせない要素であるとする。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

①池田貴夫、サハリン残留朝鮮人の生活史—境遇としての悲劇、語られる自画像—、生活学論叢、査読有、Vol. 20、2012、31—44、

②舟山直治、資料紹介 サハリン州郷土博物館所蔵のポンシントコについて、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、第40号、2012、173—182、

③会田理人、昭和戦前期の樺太におけるコンブ漁、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、第40号、2012、33—34、

④会田理人、『樺太日日新聞』掲載樺太実業団野球関係記事：目録と紹介、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、第40号、2012、183—198、

⑤会田理人、資料紹介：北海道—樺太間海底電話ケーブル、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、第40号、2012、199—204、

⑥田村将人、〈故地〉を離れた人びと—樺太アイヌの歴史—、月刊みんぱく、査読無、2011年9月号、2011、6—7、

⑦田村将人、1912年、サハリン先住民と研究者、行政の三者に関するメモ、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、第39号、2011、117-124、

⑧池田貴夫、日本領期の樺太における温泉文化誌・覚書、北海道開拓記念館研究紀要、査読無、第38号、2010、106-81、

⑨会田理人、昭和戦前期の樺太ニシン漁-1933~1935における湾内地方不漁対策を中心に-、北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史-北方文化共同研究報告-、北海道開拓記念館編、査読無、2010、81-102、

[学会発表] (計2件)

①池田貴夫、サハリン残留韓人の生活史-特に朝鮮半島系民俗文化の継承をめぐる-、第54回全国歴史学大会『国境を越えて 移住と離散の歴史』主催：全国歴史学大会組織委員会(韓国)、2011年11月5日、高麗大学(ソウル特別市)、

②池田貴夫、日本領期における樺太移民とその後-「文化」から人の生きざまを掘り起こす-、関西学院大学先端社会研究所2009年度定期研究会第10回、2009年12月11日、関西学院大学、

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 孝一 (MURAKAMI KOUICHI)
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：50150157

(2) 研究分担者

山田 伸一 (YAMADA SHINICHI)
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：30291909

池田 貴夫 (IKEDA TAKAO)
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：30300841

(3) 連携研究者

朝倉 敏夫 (ASAKURA TOSHIO)
国立民族学博物館・文化資源研究センター・教授
研究者番号：40151021

舟山 直治 (FUNAYAMA NAOJI)
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：90181445

會田 理人 (AIDA MASATO)
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：20370223

田村 将人 (TAMURA MASATO)
北海道開拓記念館・学芸部・学芸員
研究者番号：60414140